

日本におけるマライア・エッジワース文献書誌

キーワード：マライア・エッジワース，文献書誌，文学，日本

大 嶋 浩*
(平成12年 9月20日受理)

マライア・エッジワース(Maria Edgeworth, 1768-1849)¹は、明治期にいち早く日本に紹介された外国の女流作家の一人である。子供への教訓という観点が強調された、明治期の日本における子供の本の翻訳の傾向を反映して、専ら、教訓的色彩をもつ彼女の児童文学を中心にエッジワースの作品が幾つか翻訳・紹介されている。その後、大正期と昭和の前期、さらにはごく最近にも、彼女の青少年向けの短篇が翻訳されてはいるものの、その数は決して多くはない。しかも、「ジェイン・オースティンの方がより立派な作家であったが、マライア・エッジワースの方がより重要であるかもしれない」²と評価される彼女の小説に関しては、いまだ一冊もその翻訳がなされていない状況である。オースティンの陰に隠れて、とくなくおざりにされがちであったエッジワースであるが、欧米においては、新たなエッジワースの選集の刊行(現在ピカリング社から刊行中の、Marilyn ButlerとMitzi Myersを編集主幹とする、*The Novels and Selected Works of Maria Edgeworth*, 12 vols. [London: Pickering & Chatto, 1999-])にもうかがえるように、近年エッジワース再評価の機運がたかまっている。日本においてもエッジワースのさらなる紹介や研究がのぞまれる。

本書誌は、今後の日本におけるエッジワース研究の一助として、現在調査できたものをまとめたものである。各種の文学史や文学事典、概説書等に関しては、当然、エッジワースへの言及が長短織り交ぜ、数多く見いだされるが、主要なものだけを「エッジワース紹介文献」の項に収録した。なお、明治期の古い文献に関しては、文献入手の困難さを考慮して、詳しい書誌情報を盛り込んだものとなっている。また、明治・大正期の文献に関しては、原則としてできるだけ発表当時の表記に準じ、旧字体を用いてあるが、一部新字体を採用したところもある。各項目は原則として年代順に整理してある。

まだ多くの遺漏があることと思う。本書誌をより完全なものにするために、情報等をお寄せいただければ幸いである。本書誌を作成するにあたって、文献収集等に関して兵庫教育大学付属図書館の情報サービス係および国立国会図書館には特にお世話になった。また、明治期の文献の判読に関して兵庫教育大学言語系教育講座(国語分野)の教官に教えを乞うた。ここに記して感謝する。

I 翻訳

各項目の末尾、・印のついた引用文は、翻訳文冒頭の書き出し部分の抜粋である。

なお、後出の「III エッジワース紹介文献」の1990年の項も参照のこと。

1 「千人會」, エツヂウオース女史著, 思軒居士譯

『國民之友』第180号から第186号[民友社, 明治26年2月~4月]まで7回連載。Popular Tales (1804)の中の"The Lottery"を訳したもの。各号の掲載頁は以下の通り。第180号20-26頁, 第181号21-27頁, 第182号19-22頁, 第183号25-29頁, 第184号17-23頁, 第185号19-24頁, 第186号18-23頁。

第180号第1回掲載分には、その冒頭に以下のような訳者による言葉が添えられている：「エツヂウオースの諸物語は其の愛蘭人の氣質と癖とを専寫する者^(ママ)を以て本色となすスコットの『ウエヴェリー』を著すや蓋し倣ふて以て蘇蘭人を描くと云ふモーレーの博採叢書³を編む亦た特に其の愛蘭物語二編を収めり此編は女史の短章中余が尤も愛する所に係る恨めしくは未だ^(ママ)若松賤子の形管を借ふて渠か^(ママ)愛蘭物語を譯するに違あらざるを」(第180号20頁)

第186号第7回掲載分の末尾には、以下のような訳者による言葉が添えられている：「明治廿六年二月十二日午後備中笠岡の家に譯し畢る……」(第186号23頁)

のちに、『思軒全集』(堺屋石割書店, 明治40年[1907年5月])およびその再版(金尾文淵堂, 明治40年[1907年7月])に収録。ただし、雑誌連載版と比較した場合、この全集版ではルビが多少削除されている。

・「ダービーの邑の左^{はとり}ダーレー林に至る途上に一軒の板屋あり舊とモーリスロビンソンなる者の栖みし所と云ふ」(第180号20頁)

2 「俠黒兒」, 紅葉山人[尾崎紅葉]訳⁴, 武内桂舟繪

『少年文學第拾九編』(博文館, 明治26年6月28日)として、泉鏡花の「金時計」と合冊で刊行。Popular Talesの中の"The Grateful Negro"を訳したもの。ストーリーを変更しているところがあるので、正確に言えば、翻訳ではなく翻案である。なお、『少年文學』は各編読切逐次刊行の少年向け文芸叢書で、その第一編が日

*兵庫教育大学第2部(言語系教育講座)

本における近代児童文学の始めとされる、漣山人（巖谷小波）の『こがね丸』（明治24年）である。

表紙の記載は「少年文學第拾九編 俠黒兒」, 本文1頁目の内題の記載は「俠黒兒 紅葉山人」, 本文末尾(94頁)の記載は「俠黒兒」。奥付の記載は、「編輯発行者 大橋新太郎, 印刷者 杉原辨次郎, 印刷所 杉原活版所, 発兌元 博文館, 正価 金拾二銭。」本文1-123頁のうち、「俠黒兒」は1-94頁まで、95頁から123頁までが「金時計」。本文総ルビ。表紙絵, 口絵二葉（一頁大一葉, 見開き二頁大一葉）, 本文中に挿し絵15枚。

のちに、博文館版『紅葉全集』第3巻(博文館, 明治37年5月8日)に本文のみ収録。ただし、博文館版は初版(『少年文學』版)の傍線を引いたひらがな表記の固有名詞をカタカナ表記に変更。博文館版は日本図書センターより復刻版(日本図書センター, 1979年[昭和54年]12月15日)が出版されているが、この復刻版では口絵の紅葉山人の肖像写真が明治27年のものから明治34年のものに差し替えられている。岩波版『紅葉全集』第4巻(岩波書店, 1994年[平成6年]1月26日)は、誤記・誤植を訂正のうえ、初版の本文を初版の口絵、挿し絵とともに収録。岩波版の本文439頁目の内題の記載は「俠黒兒(ママ) 紅葉山人」。

・「西印度じやめいか島に殖民せる, じふえりい, えどうあゝどなる二名の英人ありけり。じふえりいは奴隷の黒人を見ること劣等動物の如く, 牛馬に等しく駆役しつ, 尚未だ彼等の全力を尽さざるを責めぬ。」(1頁)

3 「明日」, 不知庵主人[内田貢] 譯述

不知庵主人譯述による翻訳短編集『鳥留好語』(警醒社書店, 明治26年9月7日)にアンデルゼン(ママ)の「極樂郷」, 「雪の女王」, アーレン・ポウの「黒猫」, ブレット・ハートの「孤屋」, デイツケンスの「黒頭巾」と共に収められて刊行。*Popular Tales* の中の「To-Morrow」を訳したもの。ただし、「To-Morrow」の全訳ではなく抄訳, 特に後半部分は大幅に省略。

表紙の記載は「鳥留好語」, 題扉の記載は「不知庵著 鳥留好語」, 本文1頁目の内題の記載は「鳥留好語 不知庵主人 譯述」。「鳥留好語奥附」の記載は「明治廿六年九月四日印刷, 明治廿六年九月七日發行, 著者 内田貢, 發行者 福永文之助, 印刷者 根岸高光, 印刷所 秀英舎工場, 發行所 警醒社書店, 關西賣捌 福音社, 定価 二拾五銭, 郵税 四銭。」本文総ルビ。「凡例」2頁, 「目次」1頁, 本文1-170頁のうち, 「明日」は118-170頁。本文118頁目の内題の記載は「明日」。

「凡例」の中に以下のような記述が見いだされる: 「本編は歐米の文壇に聞ゆる諸氏の短編中最も秀逸なる者(ママ)を選択して之を集録す第一編に輯めたるは僅に五氏に過ぎざれど二編以下別に擇ぶべきもの多し」, 「翻譯の文跡は一定せざるのみか一字一句悉く原文に異ならざ

るを期せしもの又意味だけを取りしもの又其一部を簡略せしものあれども自ら思ふ處なきにあらねば必ずしも之を咎むる勿れ例へば『黒猫』『黒頭巾』『孤屋』等は大に原文を守りたれども他は然らざるがごとし」, 「『明日』の作者エツジウオルスは勸懲を重んずる人にして特に大家と稱するほどの大才にあらねど其作の他と色を異にせるのみならず女性に屬するをもて之を採録しぬ」。

・「余が自身の歴史を書かんと思立ちし事既に久しく今日改めて其筆を執らんと決心しぬ余は元來何事も明日に延ばすの悪癖ありて半世の好事總て之が爲に瓦解せり」(118頁)

4 「名曲『愛禽』」, 原抱一庵主人[原余三郎] 譯

抱一庵主人譯述による翻訳短編集『小説 泰西奇文』(知新館, 明治36年9月10日)にトワエン[マーク・トウェイン], ストロング, ドイル, モーパッサンの作品と共に収められて刊行。*The Parent's Assistant* (3 vols., 1796)の1800年版(6 vols.)にはじめて収録された"Simple Susan"を訳したもの。ただし、結末部等を省略した抄訳。また、原作(全2章)とは異なる章立て(全7章)がなされ、原作にはない章題が付けられている。

表紙の記載は「小説 泰西奇文 抱一庵譯」, 題扉の記載は「原抱一庵主人譯 小説泰西奇文 全 東京知新館」。表紙図案は洋画家松井昇。「桂の環」と「劔」と「五ツの星」を配した表紙図案を解説した松井昇氏書簡中の一節の引用あり。奥付の記載は「小説泰西奇文奥附, 明治三十六年八月二十九日印刷, 明治三十六年九月十日發行, 著者 原余三郎, 發行者 相見磐, 印刷者 渡邊爲藏, 印刷所 民友社, 發行所 知新館, 定價 金參拾五銭。」本文総ルビ。1-6頁にわたって「題抱一庵氏譯泰西奇文十一種」, 「讀抱一子譯杜氏短編小説」, 「該撤記事」を讀みて, 「寸書」, 「書翰」, 「複書」があり, その後に「目次」(1頁)。本文1-206頁のうち, 「名曲『愛禽』」は129-206頁。本文1頁目の内題の記載は「泰西奇文(十一種) 泰西五名家原著 抱一庵主人譯述」。本文129頁目内題の記載は「其十一 ◎名曲『愛禽』(エツジオース作)」。

・「オスウエストリーとスレスブリーの間の間なるウエルス海濱の僻遠なる一村落にて。(ママ)『五月一日』を祝ぐことは、今習慣として仍ほ残り」(129頁)

5 『小山羊の歌』 本間久譯, 黒崎修齋画(良明堂, 明治44年5月13日)

The Parent's Assistant (3 vols., 1796)の1800年版(6 vols.)にはじめて収録された"Simple Susan"を訳したもの。ただし、結末部等を省略した抄訳であり、人名などを日本風に意識した翻案である。また、原作(全2章)とは異なる章立て(全20章)がなされ、原作にはない章題(本文中にはなく, 「もくじ」にのみ掲載)が付けられている。

表紙の記載は「小やぎ(ママ)の歌」、題扉の記載は「本間久譯 小山羊の歌 黒崎修齋画」。本文1頁目の内題の記載は「小山羊の歌 (マリア, エッジワース作) 本間久譯」。奥付の記載は「家庭夜話 小山羊の歌奥附, 明治四十四年五月九日印刷, 明治四十四年五月十三日發行⁵, 譯者 本間久, 發行者 中井眞三, 印刷者 朝岡平藏, 印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場, 發兌元 良明堂書店, 定價 金六拾錢。」本文総ルビ。「はしがき」2頁, 「もくじ」1頁, 本文170頁。表紙絵・見返しの絵・題扉の絵のほか、本文中に1頁大の挿し絵が10葉, それ以外の本文中のどの頁にも小さな挿し絵(ビネット)あり。

「はしがき」の中に以下の記述が見いだされる:「一, 世の中にお伽噺も澤山あるが, イソップのような教訓的なのは面白味が少ないし, アラビヤン, ナイトやアンデルセンの物などは, 面白い代りに教訓が含まれてゐないのが多い。たまに教訓もあり面白味もあると思ふと, 文學趣味が殆ど無かつたりして。(ママ) 十二三から十五六位ゐるの齡ごろの小供には迎も向かない。/ 一, 一體十二三から十五六までの年齢の, 小供の讀物はナカナカ撰擇がむづかしいし, 我國は殊に此種の書に缺乏して居る。男の子は冒険譚を授かるから幾らか優であるが, 女の子と来ては殆ど讀むべき書をもたない。……/ 一, そこで私は, 教訓もあり面白味もあり, 又幾らか文學的價値もあって, 少年にも少女にも向くべき恰好の讀物として, 「小山羊の歌」を撰んだ。此書は實によく出来て居るので, リットル, フォントルロイ⁶に左程感心しなかつた私も, これを讀んで幾度か感激の涙を浮かべた。/ 一, 此書は小供の讀物とするのが主意であるから翻譯の仕方も意譯して, 餘程日本風にした所もある。多くは咎めずに見て貰ひたい。然し, 誤訳家として名高かつた故原抱一庵や其他二三氏も, これを譯した事があるそうだが⁷, あの方々程の誤譯はせぬつもりである。/ 少年少女の文字の智識を増す爲に, 随分むづかしい字も使つてある。そして, お伽噺では無いのだから, 假名遣ひも文部省假名は使はない。さればと云つて古來の假名遣ひは讀み悪からうから止した。」

・「ウエルスと云ふ海邊の僻田舎では, 昔から五月一日を大祭日の一つとして, 樂しく祝ふ習慣になつてゐた。今年も其五月一日が近づいて來た。」(1頁)

6 「跛のジャアバス」, 前田晁譯

ソログープ作, 前田晁譯, 『影繪』世界少年文學名作集第廿一卷(精華書院, 大正11年1月15日)に, ソログープ(表紙, 題扉ではソログープ, 「序」ではソログープと記されている)の五作品(「翼」, 「いい香のする名前」, 「影繪」, 「森の主」, 「少年の血」, 「搜索」, 「地のは地へ」, 「花冠」, 「魂の結合者」, 「獣の使者」)と一緒に収められて刊行。Popular Talesの中の"Lame

Jervas"を訳したもの。

表紙の記載は「影繪」, 題扉の記載は「ソログープ作 前田晁譯 影繪 世界少年文學名作集 第廿一卷 精華書院發行」。奥付の記載は「世界少年文學名作集(第廿一卷), 影繪, 大正十一年一月十三日印刷, 大正十一年一月十五日發行, 著者 前田晁, 發行者 大村謙太郎, 印刷者 久松鐵次郎, 印刷所 日東印刷株式會社, 發行所 精華書院, 定價二圓五十錢。本文総ルビ。「序」1-6頁, 「目次」1-3頁, 本文1-450頁のうち「跛のジャアバス」は303-450頁。本文303頁目内題の記載は「跛のジャアバス」。本文344頁に面して1頁大の挿し絵が1葉。

「序」の中に以下のような記述が見いだされる:「……わたしはソログープの作品のみで豫定の紙數を充たして, この一卷をなすことを翻譯の中途から躊躇し出した。この書の讀者が少年諸子である場合を慮つたからである。少年諸子あまりに深く人生の意義を思つて, 考え深くなるかも知れない當然の結果, 或は憂鬱な氣分に陥りほしないかと虞れたからである。少年諸子はあまりに強く魂をしめつけられてはならない。諸子は時々朗かな氣分になつて, 安易に魂を開放されなければならない。/ わたしはさう思つて, 別に『跛のジャアバス』といふ全く味の違つた一篇の物語を添えることにした。原作者はマリア・エッジワース(一七六七—一八四九)といふイギリスの閨秀作家である。この人の作はいづれも道徳的な調子が高いので聞えてゐる。どんなにか多くの若い人々が, この人の作品に依つて健實な, 明るい希望の福音を吹き込まれたことであらう。/ おゝ, 誠實と勇氣と! 人にこの二つの美德さへあれば, いかなる困難にも堪へ, いかなる迫害にも打ち勝つて, 揚々と實社会に立つて行くことが出来る。跛のジャアバスの身上話は, 取りも直さずこの眞理を具體化したものである」(「序」4-5頁)。

・「もう何年か前のことだが, コオンヨオル(註。イギリスの州の名。ロンドンからずつと遠い西の方に當つてゐる。)の錫の鑛山の一つに, ウィルヤム・ジャアバスと呼ぶ一人の少年がゐた。跛であつたために人からは跛のジャアバスと呼ばれてゐた。」(305頁)

7 『びつこのジャック』, 秋山淳譯, 装幀・さしえ 澤壽郎(寶雲舎, 昭和23年9月20日)

Popular Talesの中の"Lame Jervas"を訳したもの。

表紙の記載は「エッジワース著 秋山淳譯(ママ) びつこのジャック」, 題扉の記載は「びつこのジャック エッジワース著 秋山淳譯 寶雲舎版」。奥付の記載は「びつこのジャック(ママ) 昭和二十三年十日印刷 昭和二十三年九月二十日發行 譯者 秋山淳 發行者 小池又一郎 印刷者 宮澤安正 印刷所 信濃書籍印刷株式會社 配給元 日本出版配給株式會社 發行所 日本株式會社寶

雲舎」。「筆者紹介」1頁、「まえがき」2頁、本文1-147頁。表紙絵、色刷り口絵一葉のほか、本文中に合計19頁にわたってごく小さなものから1頁大におよぶ大小さまざまな挿し絵が挿入されている。

「まえがき」の中に次のような記述が見いだされる：「正義感と、これぞと思つたら、あくまでやりとおす勇猛心……たつたこれだけを持つて、びっこのジャックは、やまの主人に送られて、ひろい世間にでていったのです。/……/ただし、しかもゆうかんに生きる……これは、いつの世にも、必要で大切なことです。びっこ(ママ)のジャックは、いかにただし、ゆうかんに生きたか、あなたがたに話してくれます。/びっこのジャックは、あなたがたに、おもしろい話として、鑛山の中で、またインドの一王國の中で、初歩の科学的な知識もおしえてくれます。/おわりにマリー・エッジウォース夫人は、イギリスの十九世期(ママ)前半に、有名だつた作家であつたことをつけくわえます。」

・「何年か前のこと、コンウォル(註 イギリスの一州名)の錫鑛山スズのひとつに、ウィリアム、ジャックという少年がいましたが、びっこのため、みんなはびっこのジャックと呼んでいました。」(1頁)

8 『びっこのジャアバス』、前田晁譯(童話春秋社、昭和25年7月15日)

Popular Tales 中の"Lame Jervas"を訳したもの。装幀 土村正壽、表紙繪・挿繪 志村直信。本文の訳文は上記6の「跛のジャアバス」の訳文に多少の修正を施したもの。題扉の記載は「びっこのジャアバス マリア・エッジウォース作 前田晁譯 童話春秋社版」。表紙の記載は「世界名作文庫 びっこのジャアバス マリア・エッジウォース作」であるが、奥付直前の最終頁(176頁)の記載は「少年少女世界名作文庫 びっこのジャアバス 終」。奥付の記載は「昭和二十五年六月廿五日初版印刷、昭和二十五年七月十五日初版発行、譯者 前田晁、發行者 伊達豊、印刷所 玄眞社印刷所、發行所 株式會社童話春秋社、定價 120 圓、地方賣價(運賃諸掛共) 125 圓」。「目次」1-2頁、本文1-162頁、「解説」163-75頁。

「解説」の中に以下のような記述が見いだされる：「……エッジウォースが(ママ)最初の出版は、一七九六年、二十九歳の時の『親たちの助手』という教育に關したものでした。……最初の小説は一八〇〇年に出した『ラックレント城』で、廣く一般の稱讚を博したのできこえています。アイルランドの農民生活を描いたもので、教育的といわれるところも多少は見えていますが、物語作者の資格として最も大事な、ユーモア(愛嬌のある滑稽)と、品性の潔さが、はるかにすぐれているので、作品をあかるくしているといわれています。……/一八〇四年、三十六歳の時に、『通俗物語』が出ました。

——『びっこのジャアバス』は、その物語の中の一つです。——この書が出版されて以来、エッジウォースの聲價は不動なものとなって、その後は一作また一作、出るたびごとにますます評判が高くなるばかりでした。一八三四年、六十七歳の時に『ヘレン』が出るまで、それがつづいて、小説もあれば喜劇もあり、少年少女のために書いたものも、たくさんありました。/この長い年月の間、エッジウォースが、その豊かな創作力でもって、アイルランド人のあらゆる面における社會生活を描いたすぐれた作品には、その後、追いつくものはほとんどなかったといわれていますが、それよりもさらに一そうよい影響を、廣く與えたので名高いのが、少年少女のために書いた物語です。ここでは道德上の眞理を、趣味として一面にまきちらしながら、若い人々の注意をたくみにとらえて、空想の世界へつれていくことに成功している、といわれています」(165-66頁)。「なお、この『びっこのジャアバス』は、原文をそのまま譯したもので、一字一句も、へらしもふやしもしてはありません」(171頁)。「誠実と勇氣!人にこの二つの美德があつて、それに正しい知識を着々と身につけていけば、いかなる困難にも堪え、いかなる迫害にも打ち勝つて、揚々と實社會に立つていくことができるのです。びっこのジャアバスの身の上話は、とりもなおさず、この眞理を一人の人間の姿にして見せたものです。/原作者エッジウォースの作品によって、どんなにか多くのイギリスの若い人々が、健實な、あかるい希望の福音を吹きこまれたか知れないといわれているように、日本の少年少女諸君もまた、この主人公の身の上話から、たくさん興味と教訓とを得られるようにと、譯者は願っています」(174-75頁)。

・「もう何年か、ずっと前のことだが、コーンウォール(註。イギリスの州の名。ロンドンからずつと遠い四の方に當つている。)の錫の鑛山スズのひとつに、ウィルヤム・ジャアバスと呼ぶひとりの少年がいた。びっこだつたので、人からはびっこのジャアバスと呼ばれていた。」(2頁)

9 『嵐をこえて』、前田晁訳、世界少年少女名作選集(同和春秋社、昭和29年11月15日)

Popular Tales 中の"Lame Jervas"を訳したもの。装幀 桜井誠、カバー 大橋彌生、挿繪 志村直信。本文、解説および挿繪は上記8の『びっこのジャアバス』と同一内容のもの。

表紙の記載は「世界少年少女名作選集 嵐をこえて エッジウォース作 前田晁訳」、題扉の記載は「世界少年少女名作選集 嵐をこえて エッジウォース(ママ)作 前田晁(ママ)訳」。奥付の記載は「世界少年少女名作選集、嵐をこえて、昭和二十九年十一月一日初版印刷、昭和二十九年十一月十五日初版発行、譯者 前田晁、印刷所 大盛印刷株式会社、發行者 篠崎仙司、發行所 株式會

社同和春秋社、定価 140 円)。「目次」1-2 頁、本文1-162 頁、「解説」163-75 頁。本文 1 頁目の内題の記載は「嵐をこえて 原名びっこのジャアバス(ママ)」。

・「もう何年か、ずっと前のことだが、コーンウォール(註。イギリスの州の名。ロンドンからずつと遠い四の方に當っている。)の錫の鑛山の一つに、ウィルヤム・ジャアバスと呼ぶひとりの少年がいた。びっこだったので、人からはびっこのジャアバスと呼ばれていた。」(2 頁)

10 「リメリック手袋」, 橋本楨矩編訳, 岩波文庫(岩波書店, 2000 年[平成 12 年]7 月 14 日) 15-56.

Popular Tales 中の"The Limerick Gloves"を訳したものの。編訳者による「マライア・エッジワース」の解説付き(389-90 頁)。

・日曜日朝、すばらしい秋日和だった。ヘレフォード・カテドラルの鐘が鳴り、お洒落をした町じゅうの人々が教会に集まり始めていた。(16 頁)

補遺

Popular Tales の初版本(1805 年)には、各物語の各章に Thomas Holcroft によって書かれた章題が出版者 Joseph Johnson によって挿入されている。*Popular Tales* の第 2 版(1805 年)でこれらの挿入された章題は削除された。また、第 2 版では各物語の章立てにも変更が加えられ、どの物語においても数章が結合されてその章数が減らされている。ただし、"The Grateful Negro" (「俠黒兒」)だけはそもそも初版から章分けがなされておらず、それゆえ章題も存在しない。

ちなみに"The Limerick Gloves"の場合、初版では全 8 章であったのが、第 2 版では全 2 章となっている。岩波文庫版の「リメリック手袋」の翻訳は全 2 章からなり、各章の章題もつけられていないことから、初版本に基づくものではないようである。

なお、*Popular Tales* の各物語の末尾には執筆の日付と思われるものが付けられている。"The Limerick Gloves"の日付は"Nov. 1799"である。

他の *Popular Tales* からの翻訳(1「千人會」, 2「俠黒兒」, 3「明日」, 6『跛のジャアバス』, 7『びっこのジャック』, 8『びっこのジャアバス』, 9『嵐をこえて』)についても、若干の補足をしておく。これらの翻訳は、2 の「俠黒兒」を除いて、各章の章題やその章立てから判断する限り、3 の「明日」(章題が付いていない)以外、初版本に基づくものようである。各物語の日付は 1 の"The Lottery"が"Sept. 1799", 2 の"The Grateful Negro"が"March, 1802", 6-9 の"Lame Jervas"が"October, 1799"となっている。2 の「俠黒兒」は、すでに述べたように、原作では章分けがなされていないのであるが、紅葉訳では(一)~(六)の全 6 章(各章に章題は付い

ていない)に分けられている。(*Popular Tales* の初版と第 2 版の詳細に関しては Bertha Coolidge Slade, *Maria Edgeworth 1767-1849: A Bibliographical Tribute* [London: Constable, 1937]103-113 を参照)

II 英文テキスト版

1 *Edgeworth's Moral Tales*, 3 vols. (三省堂, 明治 32-34 年)

The Parent's Assistant 中の以下の五作品のテキストが収められている。1. "Lazy Lawrence" 2. "Tarlton" 3. "The White Pigeon" 4. "Forgive and Forget" 5. "Simple Susan"。なお、これらの作品のうち、1 と 2 は *The Parent's Assistant* の初版(1796)にすでに収められていたらしいが、3, 4, 5 はその第 3 版(1800)にはじめて収められたもの。⁸

第 1 巻から第 3 巻まで、頁は通し番号で付けられている。各巻に収められた作品名と頁番号は以下の通り。第 1 巻 "Lazy Lawrence" 1-40 頁, 第 2 巻 "Tarlton" 41-68 頁 "The White Pigeon" 69-83 頁 "Forgive and Forget" 84-100 頁, 第 3 巻 "Simple Susan" 101-74 頁。

第 1 巻の表紙の記載は「EDGEWORTH'S MORAL TALES. VOL I. TŌKYŌ: SANSEIDŌ.」, 題扉の記載は「EDGEWORTH'S MORAL TALES TŌKYŌ SANSEIDŌ」。奥付の記載は「エツヂウオルス奥付, 明治三十二年七月二日印刷, 明治三十二年七月七日発行, 刪訂者 吉岡哲太郎, 發行者兼印刷者 龜井忠一, 發行所 三省堂書店, 印刷所 三省堂印刷部, 定價金十五錢」。

第 2 巻の表紙の記載は「EDGEWORTH'S MORAL TALES. VOL II. TŌKYŌ: SANSEIDŌ.」, 題扉の記載は「EDGEWORTH'S MORAL TALES TŌKYŌ SANSEIDŌ」。奥付の記載は「エツヂウオルス二巻奥付, 明治三十二年八月十五日印刷, 明治三十二年八月廿二日発行, 刪訂者 吉岡哲太郎, 發行者兼印刷者 龜井忠一, 發行所 三省堂書店, 印刷所 三省堂印刷部, 定價金十五錢」。

第 3 巻の表紙の記載は「EDGEWORTH'S MORAL TALES. VOL III. TŌKYŌ: SANSEIDŌ.」, 題扉の記載は「EDGEWORTH'S MORAL TALES TŌKYŌ SANSEIDŌ」。奥付の記載は「エツヂウオルス三巻, 明治三十四年十一月九日印刷, 明治三十四年十一月十二日発行, 刪訂者 吉岡哲太郎, 發行者兼印刷者 龜井忠一, 發行所 三省堂書店, 印刷所 三省堂印刷部, 定價金十五錢」。

2 『英文小品五題』, 津田梅子校訂(丁未出版社, 明治 43 年 11 月)訂正再版は明治 44 年 2 月発行。本書誌情報はこの訂正再版による。

The Parent's Assistant 中の以下の五作品のテキストが縮約・改作されて収められている。1. "The Basket-

Woman" 2. "The Orphans" 3. "Lazy Lawrence" 4. "Forgive and Forget" 5. "The False Key". なお、これらの作品のうち、3と5は *The Parent's Assistant* の初版(1796)にすでに収められていたらしいが、1, 2, 4はその第3版(1800)にはじめて収められたもの。⁹

表紙の記載は「FIVE STORIES MISS EDGEWORTH ABRIDGED AND ADAPTED BY UME TSUDA 津田梅子校訂 英文 小品五題」、題扉の記載は「FIVE STORIES FROM MISS EDGEWORTH ABRIDGED AND ADAPTED BY UMÉE TSUDA 1910 TEIBI PUBLISHING CO. TOKYO」。奥付の記載は「英文小品五題、明治四十三年十一月十五日印刷、明治四十三年十一月十八日発行、明治四十四年二月七日訂正再版印刷、明治四十四年二月十一訂正再版発行、著作者 津田梅子、発行者 土屋泰次郎、印刷者 青木弘、發行所 丁未出版社、正價金叁拾錢」。全178頁のうち、「The Basket-Woman」は1-25頁、「The Orphans」は26-62頁、「Lazy Lawrence」は63-110頁、「Forgive and Forget」は111-39頁、「The False Key」は40-178頁。¹⁰

III エッジワース紹介文献

(i) 明治期

後出の1982年の文献「ラフカディオ・ハーン、『英文学史 II』」の項も参照のこと。

1886年(明治19年)

アントニー、トロロフ(ママ)著「小説論」、土屋元吉譯、『中央學術雑誌』第40号(明治19年11月10日): 47-56。

『中央學術雑誌』の「雑録」の項に掲載されているもの。この小説論は「十九世紀雑誌に載する所にして英國近時にありて有名なる小説家トロロフ氏の投寄にかゝるもの」(56頁)。人を楽しませ、かつ、人を教える、英國の稗史家のうち、「古今の名家」の一人として、「アッステン、スコット、 Dickens、及びサッケレー」と並んで「エッジワース」(50-51頁)の名が挙げられている。

なお、この評論はAnthony Trollope, "Novel-Reading," *The Nineteenth Century* (Jan. 1879):24-43のうち、38-43頁を訳したもの。

1888年(明治21年)

「子供と物語本」、『以良都女』15(明治21年9月15日): 241-42。

児童文学者としてのエッジワースに言及したもの：「西洋でも矢張り子供のお伽話があります。イソップの作話(ママ)、グリムスの話、エッジワースの話などハ皆西洋の花咲翁、かちかち山のはなしです。」(241頁)

1890年(明治23年)

雲峯生、「文學思想の盛衰、ホームの影響(下)」、『女學雑誌』第234号(明治23年10月11日): 14-17。

エッジワースの父リチャード・ラヴェル・エッジワースに与えた「母の感化」の例、および、「一人の秀才一家を動かす」ことの一例として、父リチャード・ラヴェル・エッジワースに関して娘のエッジワースが述べている事柄を紹介したもの：「エッジワースの母夙く彼の性質を悟りよく教道せり、母病床にあり、老症衰古の餘、將に氣息終らんとする時、エッジワース驚き馳せて見舞ふ、苦しげなる内、絶えなんとする聲の下より彼が將來に訓戒を垂れたり其一語永く影響して幸ならしむと、彼常に自白せり。……秀才一家にあり、一種の氣風溢れ、其才能蔓延して一家悉く化せらる、エッジワース(ママ)の女云へる事あり『妾の父上が活潑々地に事を處せらるゝ故活氣内に満ち、兄弟姉妹自ら相和(ママ)し、相活す、常に相助け、相勵みて勉むる故皆快く日を送る』」(234-35頁)。

1893年(明治26年)

フレデリック・ハリソン、「英國文學の不振何ぞ夫れ此の如きや」、『國民之友』第12巻第191号(明治26年5月23日): 39-40。

フレデリック・ハリソン(Frederic Harrison, 1831-1923)による現代英國文學界批評の翻訳。その要点は「最後に残りたるトロロフ死してより既に十年、英國文學界の振はざる何ぞ此の如きや、英語の聞かるゝ所、遭ふ人毎に携へざるなき著作一も出でざる也」(39頁)というもの。『國民之友』の「海外思潮」の欄に掲載。以下のようなエッジワースへの言及がある：「十九世紀の幕は"Castle Rackrent"とマリア、エッジワースの創作に富める傳奇によりて開かれたり」(39頁)。

なお、この評論の内容は、後年ハリソンが出版した評論集 *Studies in Early Victorian Literature* (London and New York: Edward Arnold, 1895)でいえば、その第1章"Characteristics of Victorian Literature"中の22-38頁に書かれている内容と同様のものようである。ただし、その評論集のものより、ずっと簡略なものとなっている。¹¹

後出の文献、1894年の「英國ヴィクトリア時代の文學」と1896年の「ヴィクトリア朝の英文學」の項もあわせて参照のこと。

鄭漢生、「翻譯流行」、『早稲田文學』第45号(明治26年8月10日): 302-03。

紅葉、不知庵によるエッジワースの翻訳に言及：「紅葉がものせしエッジワースの『俠黒兒』あり……又不知庵が近ごろ世に出だせし『鳥留好語』といふもポー、アンダルセン(ママ)、エッジワース等の手に成れる小話を

譯出せるものなりとぞ」(302-33頁)

「鳥留好語」、『早稲田文學』第49号(明治26年10月13日):12.

「新刊」の欄で、『鳥留好語』の紹介をしたもの:「有名なる西洋小説家のものせし小話、端篇を翻譯せしものにてアングルゼン^(ママ)の『極樂郷』、『雪の女王』、アレン、ポーの『黒猫』、ブレット、ハートの『孤屋』、デッケンスの『黒頭巾』、エッチワースの『明日』の六篇を載せたり」(12頁)

1894年(明治27年)

「英國ヴィクトリア時代の文學」、『日本大家論集』第6巻第12号(明治27年12月10日):103-05.

『日本大家論集』の「雜録」の項に掲載。末尾に「日本新聞所載摘要」と記されている。ヴィクトリア女王が即位した1837年の当時に生存していたけれども、その「傑作雄編は皆其以前に」成っていた大家たちの一人として、「エッチワース」(103頁)の名があげられている。

なお、この評論の内容は、ハリソンの評論集*Studies in Early Victorian Literature* (London and New York: Edward Arnold, 1895)でいえば、その第1章"Characteristics of Victorian Literature"中の1-19頁に書かれている内容を要約したものに相当する。前出の1893年の文献「英國文學の不振何ぞ夫れ此の如きや」の項及び注10を参照。

1895年(明治28年)

湖處子、「ミス、エッチワースを紹介す」、『家庭雑誌』第51号(明治28年4月10日):274-79.

リチャード・ラヴェル・エッジワースとマライア・エッジワースの略伝を述べたもの:「先輩思軒居士『千人會』を譯せしより、ミスエッチワースの名漸く讀詩社會の注意を惹き起せり。左の一篇は記者が同女史に就き、ある人々の質問に答へたるもの。零々たる斷片に過ぎず^(ママ)と雖、或は女史一斑を讀書社會に紹介するに足らん乎」(274頁)。なお、この略伝中、小説家としてのエッジワースは「歐洲の文界」における「田園小説の開山」(277頁)であると紹介され、彼女の傑作として「カッスルバックレント^(ママ)」(277頁;同頁中には「カッスル、ラックレント」という表記も見られるので、この「バックレント」は誤植であろう)が挙げられている。

1896年(明治29年)

フレデリック、ハリゾン^(ママ)、「ヴィクトリア朝の文學」、『日本英學新誌』第88号(明治29年1月20日)から第98号(明治29年7月20日)まで、3号分(第90

号、第93号、第94号)を除いて、8回連載。各号の連載頁は以下の通り。第88号1-5頁、第89号(明29.1.22)1-4頁、第91号(明29.2.28)1-3頁、第92号(明29.3.28)1-4頁、第95号(明29.5.25)1-3頁、第96号(明29.6.15)1-3頁、第97号(明29.6.30)1-3頁、第98号1-3頁。

Frederic Harrison, "English Literature of the Victorian Age" の翻訳。原文付き。「現代英國の文豪フレデリック、ハリゾン氏が一昨年公けにしたる論文」(第88号1頁)。「現世紀の初期に屬する大文士輩」の一人として「エッチワース女史」(同号3頁)の名が挙げられている。また、ヴィクトリア朝の人々と其の前の時代の人々との相違の一例としてエッジワースへの言及がなされている:「エッチワース女史やオースチン女史の描ける社會をばデジョージエリオットの社會と並べ觀るに何ぞ夫れ新世界の如くなるや」(同号4-5頁)。

この評論は、ハリソンの評論集*Studies in Early Victorian Literature* (London and New York: Edward Arnold, 1895)でいえば、その第1章"Characteristics of Victorian Literature"中の1-21頁に書かれている内容とごくわずかな相違を除き、ほぼ完全に一致する。

前出の1893年の文献「英國文學の不振何ぞ夫れ此の如きや」の項および注10を参照。

「女性作家に望む」、『太陽』第2巻第3号(明治29年2月5日):97-98.

日本の閨秀作家が見習うべき女流作家の一人として、エッジワースが言及されている:「女性は男性と共に人心の一半を別つ^(ママ)、元より是れ自らの觀察と情緒と理想とを有す、其著作亦吾等の見るべからざる世界を有すべし……其獨特の見地に據りて平生の素養を傾注せば妙自ずから其中に在らむ、諸君もしエリオット、エッジワース、クレア諸氏の著作を翫味せば其成功したる所以の如何に女らしき所にあるかを知るに足らむ」(98頁)。

K. K., 「英國小説家の批評比較及び價值(續)」、『帝國文學』第2巻第5号(明治29年5月):68-77. なお、この評論は『帝國文學』第2巻の第1号(明29.1):73-80、第3号(明29.3):77-81、第5号、第7号(明29.7):86-91に4回に分けて連載されたもの。本編はその第3回連載分にあたる。

『帝國文學』の「雜録」の項に掲載。「其當時にありては甚だしき名聲ありしも、今は全く地に墜ちたる」伶俐の女作家として「エッチワース嬢(Miss Edgeworth 一七六五^[ママ]-一八四九)」(71頁)に言及。「彼女は勸懲小説を作れり、彼女に至りて始めて吾人は『目的ある小説』なるものに遭遇せり、此種の小説は今や全く其聲

價を失し、小説、詩歌、戯曲を問はず苟もかゝる臭味あるものは人皆之を排斥して、美術家たるものは決して説教家若くは哲學者の領分に侵入すべからざるものとせらるゝに至れり……總じて美術の上乗なるものには人生改善の目的あつて存ず、然れども此目的や、外に現れずして内に藏れおるなり、其状恰も人間を活動せしむる精神なるものが、生活の神秘なる素因となりて軀中に潜むが如し、惜い哉、エッチウォルスの小説には此精神一目瞭然火を視るよりも明らかなるが故に、進んで活動^(ママ)せんとすれば忽ち其精神たるべき神秘性を失ふ、されば吾人は彼女の小説を上乗の作となすこと能わざれども、或人の所謂『思想の健全』は慥かに彼女の作中に求めらるべく、性格法も又凡手を超えて能く愛蘭農夫の面目を描出し得たり」(71-72頁)。

新渡戸稲造、「本邦文学美術ニ新意匠注入ヲ促カス^(ママ)」、『国民之友』第19巻第318号(明治29年10月17日)：17-21。

農業を「文學美術ノ題」(20頁)に上らせる必要を説いたもの。英国文学界に推重された農業の一例としてエッジワースへの言及がなされている：「英國ハ十七世紀末ヨリ十八世紀ノ始メ一時農民ノ吟詠ニ入ルコト衰ヘタルモ Ramsay 氏ニ至リ恢復スル所アリ田舎思想ノ文壇に推奨セラレタルヤ大ナリ其他 Burns, Goldsmith, Wordsworth, Scott, Cowley, Edgeworth 等ノ著一見セバ農業ノ文學界ニ推重セラレタルノ一般ヲ知ルニ足ラン」(19頁)

セシル、ド、シーリー、「文學に映せる米國婦人」、玄洋子譯、『国民之友』第19巻第328号(明治29年12月26日)：43-45。

『コンテムポラリー、レヴ#ユー』のセシル、ド、シーリーの所論の翻訳。『国民之友』の「海外思潮」の欄に掲載。米國婦人「マリヤ、ミツチエル」女史と「聲譽を同ふする名媛佳嬪」の一人として「マリヤ、エッジワース」(43頁)の名前が挙げられている。シーリーの所論の原典は、C. de Thierry, "American Women, from a Colonial Point of View," *Contemporary Review* 70 (October, 1896): 516-28。

1901年(明治34年)

坪内雄藏、『文學叢書 英文學史』(東京専門學校出版部、明治34年6月2日)620-22。

再版明治35年2月10日。発行(エッジワースに関する記載は626-28頁)。

エッジワースの小説だけでなく、消息文および「専ら少年向きにとて作りし著述」にも言及。「マリヤ、エッジワース」は「身を終るまで文名を保ち得て、言行はた

其の名に愧づる所なかりき、剩へ近時に至りては令譽更に一段を加へたり。……按ふに、小説家たるの資格よりいへば……エッジワースは、バル子¹²を殿とせる十八世紀小説家とオースチンを前驅とせる十九世紀小説家との中間に位すべき作家なりと稱すべし……。女史は天才に遠からざるいみじき技能を有し、且つ滑稽にも……長じたりしが、惜むらくは總じて最も肝要なる用意を誤りたり、すなわち女史は個人といはんよりも寧ろ類型といふべき若干の愛蘭土人の外には多く人物を描くこと能はず、動もすれば所謂偶人を作りて魂を入るゝことを忘れたる概あり」(620-22頁)。

1907年(明治40年)

淺野和三郎、『英文學史』(大日本圖書株式會社、明治40年2月28日)

第三版明治41年8月25日発行。本項の記述はこの第三版による。

「十八世紀小説と十九世紀小説との間に連鎖を作れる」(538頁)女流作家中の三人の傑物として、オーステン女史、ファニー・バーニィ、マライア・エッジワースを挙げている。エッジワースの描ける方面は、「英國の流行社會あり、又愛蘭の農民界あり、同時の他の作家に比し材料甚だ豊富也。……眞面目に愛蘭人民の眞相を世に紹介したるものにては、一八〇〇年に出せる『ラックレント城』最も名あり。スコットの激稱を買ひたる佳作にして最も重すべし。……女史の作全部に流るゝものは倫理的觀念にして、その物語は大體に於て此觀念を包む所の衣服に過ぎず」(542-43頁)。「エッジワースは勸懲を主とし、オーステンは姑息的社會を想像し……」(783頁)。

夏目金之助、『文學論』(大倉書店、明治40年5月7日)

第一編第二章において、「古來三大文豪 [Boccaccio, Petrarch と Chaucer] の手に觸れたるもの」として Patient Griselda の物語に言及した箇所の中で、以下のようにエッジワースにも言及：「Maria Edgeworth の小説中 *Modern Griselda* なるものあれども、其内容に多大の類似あるにはあらず」(55頁)。

1911年(明治44年)

『東京朝日新聞』(明治44年5月26日)の「新刊雜書」の欄で、「小やぎの歌(本間久譯)」を以下のように紹介：「マリヤ、エッジワースの原作にて十二三より十五六歳までの子供の讀物とせるお伽噺風の小説也」。

(ii)大正期以降(文学史・文学事典・概説書等のうち主要なもののみ；翻訳ものも含む)

1924年（大正13年）

小日向定次郎、『英文學史 ドライデン時代よりヴィクトリア朝初期迄』（文献書院）327, 523-25.

1927年（昭和2年）

佐治秀壽、『英國小説史』（研究社）58-60.

齋藤勇、『思潮を中心とする英文學史』（研究社）315. その後の主要な改題、改訂は以下のとおり。『思潮中心の英文學史』増補改訂新版（1932年）、『英文學史』三訂新版（1938年）、『イギリス文學史』第四増補版（1957年）、『イギリス文學史』改訂増補第五版（1974年）。『イギリス文學史』第四増補版（1957年）において、エッジワースに関する記述は、参考文献も含め、かなりの増補、改訂がなされている。

1931年（昭和6年）

「エッジワース」、『圖解 現代百科辭典』第1巻（三省堂）316. エッジワースの肖像が一葉掲載されている。

「エッジワース Edgeworth, Maria」、『西洋人名辭典』（岩波書店）171. 1956年発行の『岩波西洋人名辭典』におけるエッジワースの項目の内容とは大幅に異なる。

1937年（昭和12年）

北村常夫、「Edgeworth, Maria」、『研究社英米文學辭典』（研究社）224. なお、同辭典中にはエッジワースの肖像が一葉掲載されている。その掲載図版は『圖解 現代百科辭典』第1巻（三省堂、1931）と同種のもの。増訂新版（第2版、1961年）に関しては1961年の項を見よ。

1943年（昭和18年）

中川芳太郎、『歐羅巴文學を併せ觀たる英文學史』（研究社）500. エッジワースの肖像が一葉掲載されている。その掲載図版は『研究社英米文學辭典』（1937）と同種のもの。

1946年（昭和21年）

大和資雄、『英文學史 下巻』（野村書店）49-50.

1952年（昭和27年）

「エッジワース Edgeworth, Maria」、『世界人名辭典 西洋篇』（東京堂出版）。1971年刊行の『新版 世界人名辭典 西洋編』（東京堂出版）および1993年刊行の『新版 世界人名辭典 西洋編<増補版>』（東京堂出版）でもエッジワースの項目の記載内容に大幅な改訂はなく、旧版の辭典とほぼ同一内容のものとなっている。

なお、同辭典・辭典中におけるエッジワースの生年月日の記載（1766年6月11日）は1767年1月1日の誤りであろう。（本書誌注1を参照）

近藤いね子、『イギリス小説論』（研究社）65-68. Jane Austen を論じている箇所でエッジワースに言及。

1953年（昭和28年）

「エッジワース」、『新百科大辭典』（三省堂）169. エッジワースに関する記載内容は上記1931年の『圖解 現代百科辭典』と同一。ただし、エッジワースの肖像は掲載されていない。

1956年（昭和31年）

「エッジワース 2) Maria」、『岩波西洋人名辭典』（岩波書店）255. なお、増補版(1981年)におけるエッジワースの項目は1956年版と同一。

1960年（昭和35年）

近藤いね子、「i. マライア・エッジワース」、『英米文學史講座 第七巻 十九世紀 I』, 福原麟太郎・西川正身監修（研究社）44-46.

1961年（昭和36年）

北村常夫・海老池俊治、「Edgeworth, Maria」、『研究社英米文學辭典』増訂新版（研究社）295. なお、同辭典中のエッジワースの肖像は初版（1937年版）のものとは異なるものが掲載されている。1985年刊行の第3版におけるエッジワースの項目は、掲載図版も含め、増訂新版（第2版、1961年）と同一。

1963年（昭和38年）

神宮輝夫、『世界児童文學案内』（理論社）29-31.

齋藤勇、『英文學史概説』（研究社）162.

アイヴァ・エヴァンズ、『小英文學史』, 朱牟田夏雄・北川梯二・長谷川正平・日高八郎 訳（北星堂書店）206. なお、エッジワースに関する記載は改訂増補第4版（1984年）においても1963年版と同一。

1966年（昭和41年）

海老池俊治、「エッジワース, マライア」、『新潮世界文學小辭典』（新潮社）127. なお、1990年刊行の『増補改訂 新潮世界文學辭典』ではエッジワースに関する記載内容が若干改訂されている。

1968年（昭和43年）

星野二・荒井良雄,『立体イギリス文学』(朝日出版) 258, 259.

1970年(昭和45年)

白木茂,「エッジワース」,『児童文学辞典』(東京堂出版) 69. なお,同辞典の「イギリスの児童文学」の項(31頁)にもエッジワースへの言及がある。

1971年(昭和46年)

平井正穂・海老池俊治,『イギリス文学史』(明治書院) 183-84. 本項の記載は第6版(1977年)による。

神宮輝夫,「4 トーマス・デイとマライア・エッジワース」,『英米児童文学史』,瀬田貞二・猪熊葉子・神宮輝夫共著(研究社) 76-78. 「マライア・エッジワース」の肖像および「『ありふれた物語』の口絵 Chris Hammond 画」のモノクロ図版各一葉掲載。

榎本太,「1. エッジワース」,『講座英米文学史 8 小説 I』,朱牟田夏雄責任編集(大修館書店) 336-39.

1972年(昭和47年)

海老池俊治,「エッジワース Maria Edgeworth」,『世界大百科事典』第3巻(平凡社) 506.

「エッジワース Edgeworth, Maria」,『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』第1巻(ティビーエス・ブリタニカ) 519-20. なお,1988年刊行の改訂版ではエッジワースの項目の記載内容が若干改訂されている。1993年刊行の第2版改訂ではエッジワースの項目の記載内容に改訂はなく,1988年の改訂版と同一内容のものとなっている。

1973年(昭和48年)

田中睦夫,「イギリスの女流作家: Maria Edgeworth」,『英文学への道』(八潮出版) 176-80.

安達美代子,「エッジワース」,『万有百科大事典 1 文学』(小学館) 84.

1975年(昭和50年)

小倉多加志,『イギリス文学史要説』(南雲堂) 59-60.

岡本成蹊,『イギリス近代小説の形成』(桐原書店) 373-75.

1976年(昭和51年)

小場瀬卓三・佐藤静夫・日高八郎・北条元一編,『世

界の文学 5 19世紀前半編 ロマン主義の時代』78.

1977年(昭和52年)

ジョージ・サンプソン(R.C.チャーチル補筆),『ケンブリッジ版イギリス文学史 II』,平井正穂監訳(研究社) 374-75.

三宅興子,「教訓派の作家たち: T. デイ, M. エッジワース, シャーウッド夫人ほか」,『英米児童文学』高杉一郎編著(中教出版) 29-30.

星野二・荒井良雄,『世界文学シリーズ・イギリス文学案内』(朝日出版) 254. エッジワースに関する記載は1968年発行の『立体イギリス文学』のものと同一内容。

ジョージ・サンプソン(R. C. チャーチル補筆),『ケンブリッジ版イギリス文学史 III』,平井正穂監訳(研究社) 441-42.

1978年(昭和53年)

大社淑子,「エッジワース, マライア」,『英米文学辞典』,鈴木幸夫編(東京堂出版) 51.

1979年(昭和54年)

「エッジワース Maria Edgeworth 1767~1849」,『21世紀世界百科 カラーマ』第2巻(主婦と生活社) 314.

1981年(昭和56年)

出口保夫,『イギリス文学の基礎知識』(評論社) 138.

1982年(昭和57年)

J. R. タウンゼンド,『子どもの本の歴史 上』,高杉一郎訳(岩波書店) 46-47.

ラフカディオ・ハーン,『英文学史 II』,野中涼・野中恵子訳,ラフカディオ・ハーン著作集第12巻(恒文社,1982)113-15, 118. ハーンは明治29年秋から明治36年3月まで東京大学で毎週英文学史の講義を行った。この6年半の間にその講義は二まわりした。この『英文学史』はその二回目の講義を聞いた学生のノートブックを本に編集したもの。(ラフカディオ・ハーン,『英文学史 I』,野中涼・野中恵子訳[恒文社,1981]の「解説」を参照)

1983年(昭和58年)

近藤いね子,「英文学史上におけるブロンテ」,『ブロンテ研究』,青山誠子・中岡洋編(開文社) 353-54. エ

ミリ・ブロンテの『嵐が丘』の物語形式との関連で『ラックレント城』に言及。

「エッジワース Edgeworth, Maria」, 『大事典 desk』(講談社) 292.

1984年(昭和59年)

海老根宏, 「エッジワース Maria Edgeworth」, 『大百科事典』第2巻(平凡社) 579.

1985年(昭和60年)

安達美代子, 「エッジワース Maria Edgeworth」, 『日本大百科全書』第3巻(小学館, 1985. 4) 538.

定松正, 『児童文学: 英米の子供の本の世界』(こびあん書房, 1985. 4) 23.

1986年(昭和61年)

佐柳文男, 「エッジワース, マライア」, 『キリスト教人名辞典』(日本基督教団) 272.

櫻庭信之・蛭川久康編著, 『アイルランドの歴史と文学』(大修館, 1986. 4) 56-57.

ピエール・クースティアス, ジャン・P・プチ, ジャン・レイモン, 『十九世紀のイギリス小説』, 小池滋・白田昭訳(南雲堂) 73-75.

1989年(昭和64年/平成元年)

神宮輝夫, 『児童文学の主役たち』, NHK 市民大学テキスト(日本放送出版協会) 14.

1990年(平成2年)

ブリジェット・ヒル, 『女性たちの十八世紀: イギリスの場合』, 福田良子訳(みすず書房) 18, 62-65, 79, 82-83, 84-85. 18世紀イギリス女性史の資料のアンソロジー。各題目に短い解説が付いている。79頁にはエッジワースの作品 *Letters for Literary Ladies* (1795) からの抜粋が, 82-83頁および84-85頁には *Practical Education* (1798)からの抜粋が載っている。

1992年(平成4年)

ニュー・ファンタジーの会, 『イギリス女流児童文学作家の系譜2 ひなぎく的首飾り』(透土社). 題扉に「Maria Edgeworth」のカラー図版一葉, 口絵として「マリア・エッジワース」, 「R. L. エッジワース」, 「R. L. エッジワースの4人の妻たち(アンナ・マリア・エラース, オノーラ・スニード, エリザベス・スニード,

フランセス・アン・ビュフォート)」, 「リチャード・ロヴェル・エッジワースとその家族たち」, 「エッジワースズタウンの館(内部)」, 「エッジワースズタウンの館(外観)」のモノクロ図版各一葉, 本文中に7枚のモノクロ図版および「年譜」(205-04頁)掲載。本書誌「IV 研究文献」中の1992年の中野節子氏の論文(中野節子, 「マライア・エッジワース: 父の愛娘として」)を参照。

1993年(平成5年)

定松正, 『英米児童文学の系譜』(こびあん書房) 53-56.

1994年(平成6年)

「エッジワース」, 『世界日本 キリスト教文学大事典』(教文館) 101.

杉本龍太郎・内田能嗣編, 『イギリス文学を読む: 流れと諸相』(創元社) 76-77.

水之江有一, 『アイルランド: 緑の国土と文学』(研究社) 226-30.

1996年(平成8年)

出淵敬子, 「エッジワース, マライア」, 『集英社 世界文学大事典 1』(集英社) 476.

1997年(平成9年)

「エッジワース, マライア」, 『岩波=ケンブリッジ世界人名辞典』(岩波書店) 159.

1998年(平成10年)

三宅興子, 「エッジワース, マライア」, 『児童文学事典』, 日本児童文学学会編(東京書籍) 92-93.

武井博美, 「華やかな仮面と悲しき素顔: マライア・エッジワース」, 『ベリンダ』, 『楽しく読める英米女性作家』, 久守和子・窪田憲子・石井倫代編著(ミネルヴァ書房) 14-15. エッジワースの肖像(モノクロ図版)一葉掲載。

「エッジワース」, 『新世紀ビジュアル大辞典』(学習研究社) 287.

1999年(平成11年)

ハンフリー・カーペンター, マリ・プリチャード, 「エッジワース, マライア」, 『オックスフォード世界児童文学百科』, 神宮輝夫監訳(原書房) 102-04.

大澤正佳, 「エッジワース」, 『アイルランド文学小事

典』, 松村賢一編 (研究社) 138-39.

IV 研究文献

1966年(昭和41年)

久米清, 「Maria Edgeworth の The Absentee^(ママ) を読んで: Jane Austen との関連についての若干の考察を含めて」, 『日本福祉大学研究紀要』10 (日本福祉大学, 1966.3) : 1-27.

1971年(昭和46年)

土佐亨, 「尾崎紅葉『俠黒兎』とエッジワース『恩がえしをした黒人』」, 『解釈』17. 3 (1971. 3) : 5-12. のちに、村松定孝・上笙一郎編, 『日本児童文学研究』(三弥井書店, 1974.10)に若干の補訂をして再録。

1972年(昭和47年)

山田晴子, 「マライア・エッジワースにおける地方色の意味」, 『文学研究』1号 (文学研究同人, 1972) : 30-37.

1973年(昭和48年)

長崎勇一, 「『ラクレントの館』^{やめた} (マライア・エッジワース作) 試論」, 『大東文化大学英米文学論叢』4号 (大東文化大学英米文学会, 1973.3) : 15-42.

1974年(昭和49年)

友野玲子, 「マライア・エッジワース試論: 人と *The Parent's Assistant*」, 『創立二十周年記念論集 文芸と自然』(共立女子大学文学部, 1974. 2) : 187-230.

土佐亨, 「尾崎紅葉『俠黒兎』とエッジワース『恩がえしをした黒人』」, 『日本児童文学研究』, 村松定孝・上笙一郎編 (三弥井書店, 1974.10) 60-71. 1971年の同題論文を、若干の補訂の上、再録したもの。

1976年(昭和51年)

田代幸造, 「『オーモンド』におけるテーマとモチーフ」, 『シルヴァン』19・20号 (シルヴァン同人会, 1976) : 13-23.

1978年(昭和53年)

安達美代子, 「マライア・エッジワースの教訓性」, 『イギリス小説パンフレット』5号 (イギリス小説パンフレットの会, 1978. 9) : 68-84.

1979年(昭和54年)

安達美代子, 「オースティンとエッジワース: 『マンフィールド・パーク』を中心に」, *Walpurgis* '79

(国学院大学外国語研究室, 1979.3): 37-57.

1982年(昭和57年)

相沢興一, 「*Belinda* について」, 『研究紀要』30号 (長崎県立女子短期大学, 1982.12) : 41-51

1984年(昭和59年)

伊藤智子, 「マライア・エッジワースの『ベリンダ』とジェイン・オースティンの初期作品について」, 『小説研究』2号 (小説研究編集グループ, 1984.1) : 1-7.

1986年(昭和61年)

林芳子, 「Maria Edgeworth の児童文学作品: 教育者と小説家との間で」, *TABARD* 2 (神戸女子大学英文学会, 1986.12) : 23-43.

1987年(昭和62年)

山本真知子, 「Maria Edgeworth」, 『研究紀要』15 (日ノ本学園短期大学, 1987.12) : 207-21.

1989年(昭和64年, 平成元年)

中村哲子, 「2人のベリンダ: エッジワースの『ベリンダ』改訂について」[英文], 『藝文研究』56 (慶応義塾大学藝文学会, 1989) : 31-44.

1991年(平成3年)

Saito, Yasushi (齊藤靖), "Looking for Mr Goodlandlord: *Castle Rackrent* and the Union," 『試論』30 (『試論』同人会, 1991.6) : 1-14.

1992年(平成4年)

中野節子, 「マライア・エッジワース: 父の愛娘として」, 『イギリス女流児童文学作家の系譜2 ひなぎく的首飾り』(透土社, 1992.4) 23-84. 本書誌「エッジワース紹介文献」中の1992年の「ニュー・ファンタジーの会」, 『イギリス女流児童文学作家の系譜2 ひなぎく的首飾り』を参照。

1993年(平成5年)

本合陽, 「*Ormond* における隠蔽と解放」, 『人文論集』44.1 (静岡大学人文学部, 1993. 7): 63-82.

1995年(平成7年)

Anna Ford, "Disciplined and Punished: Monstrous Mothers in *Belinda* and *East Lynne*," 『甲南大学紀要 文学編』96 (1995. 3): 66-93.

青木剛, 「女性と読者: 『ベリンダ』を例に」, 『イギ

リス近代小説の誕生』, 都留信夫編著 (ミネルヴァ書房, 1995.7) 264-71.

上村真代, 「マライア・エッジワース "The Grateful Negro": 尾崎紅葉『俠黒兎』の原作として」, 『比較文学』, 比較文化研究所編, 創刊号 (文化書房博文社, 1995.9): 237-57.

玉田佳子, 「ロマンスに対する Maria Edgeworth の二律背反的態度」, 『同志社女子大学学術研究年報』46.1 (同志社女子大学, 1995. 12): 27-54.

1996年 (平成8年)

上村真代, 「マライア・エッジワース "Simple Susan" とその翻訳: 原抱一庵『名曲「愛禽」』, 本間久訳『小山羊の歌』をめぐって」, 『比較文学』, 比較文化研究所編, 第2巻 (文化書房博文社, 1996.11): 489-511.

1997年 (平成9年)

鈴木美津子, 「Belinda における思想の戦い」, 『英文学研究』73.2 (日本英文学会, 1997.1): 207-19.

中村裕子, 「マライア・エッジワースの小説にあらわれた媒介者のいる支配者の構造」, 『神戸英米論叢』11 (神戸英米学会, 1997.8): 87-100.

1998年 (平成10年)

浅若裕彦, 「Speech and Thought Presentation in Maria Edgeworth and Jane Austen」, 『大谷学報』77.2 (大谷学会, 1998.1): 26-42.

1999年 (平成11年)

大内菅子, 「アイルランドの文学と<風土> (14) M. エッジワース: 『学識ある女性たちへの手紙』—女性の知的解放のために—」, 『相模女子大学紀要 (人文・社会系)』63 A (相模女子大学, 1999.3): 9-23.

吉川信, 「アングロ=アイリッシュ=エッジワース: 『ラックレント館』を読む」, 『人文学部紀要』34 (和光大学人文学部, 1999.12): 25-40.

2000年 (平成12年)

大嶋浩, 「『ラックレント城』におけるサディの語りの問題: えこひいきとアイロニー」, 『言語表現研究』第16号 (兵庫教育大学言語表現学会, 2000.3): 23-34.

V 邦訳研究文献

1 ウォルター・アレン, 『イギリスの小説 上』, 和知誠

之助監修 (1975; 文理, 1977) 132-38.

2 W. A. ダンプルトン, 『アイルランド: 歴史と風土と文学』, 桑原博訳 (あぼろん社, 1990) 25-34.

3 テリー・イーグルトン, 『表象のイングランド』, 鈴木聡訳 (紀伊國屋書店, 1997) 281-308.

VI その他

1 A. d. R., 「Select Bibliographies (II): F. Burney and M. Edgeworth」, 『英文学研究』第八巻第三 (帝大英文学会編, July 1928): 467-76. 『英文学研究』の「雑録」の項に収められているもの。A. d. R. は Arundell del Re. 467-71 頁までが Fanny Burney, 471-76 頁が Maria Edgeworth. エッジワースの伝記を記述した「LIFE」とエッジワースの外国文献を紹介した「BIBLIOGRAPHY」からなる。「BIBLIOGRAPHY」の部分は、「I. WORKS」と「II. BIOGRAPHY AND CRITICISM」の二項目からなる。

2 藤澤陽子, 「私とアイルランド」, 『日本アイルランド協会会報』第36号 (日本アイルランド協会, Feb. 2000): 3. モストリムのエッジワースタウン・ハウス訪問記。

注

1 エッジワースの生年は、従来 1767年とされてきたが、ここでは Marilyn Butler と Christina Colvin の説に従い、1768年とした。最新版の *The Cambridge Bibliography of English Literature* (1999) の "Maria Edgeworth" の項でも生年は 1768年とされている。なお、エッジワースの誕生日は 1月1日である。詳しくは Marlin Butler and Christina Colvin, "A Revised Date of Birth for Maria Edgeworth," *Notes and Queries* (Sept. 1971): 339-40 を参照。

2 P. H. Newby, *Maria Edgeworth* (Denver: Alan Swallow, 1950) 93-94.

3 モーレーの博採叢書とは、イギリスの英文学者 Henry Morley (1822-94) の編集した *Morley's Universal Library* (63 巻, 1883-8, 1891) のこと。各巻には Morley による批評的、伝記的序文が付いている。第 36 巻の *Stories of Ireland* (1886) に、エッジワースの二作品「ラックレント城」("Castle Rackrent") と「不在地主」("The Absentee") が収録されている。

4 創作児童文学の中で、「スケールの大きい、正統派の革命の文学」と評される、乙骨淑子の『八月の太陽を』(理論社, 1966年[昭和41年]8月; 同人誌『こだま』に1963年から1965年まで「風そよぐ島」として連載され

たものに、一部手直しをして出版)は、尾崎紅葉の「俠黒児」の影響を受けて書かれたものと指摘されている(上笙一郎、「収載論文解題」、『日本児童文学研究』、村松定孝・上笙一郎編(三弥井書店、1974.10)447;奥田継夫、「解説一八月の太陽を!」、『乙骨淑子の本 第2巻』313)。

5 国立国会図書館のマイクロフィルム版では、印刷・発行日の記載がそれぞれ明治四十四年四月二十八日・明治四十四年五月十日と印刷されているけれども、手書きで明治四十四年五月九日・明治四十四年五月十三日と訂正されている。ここではその訂正に従った。

6 バーネットの『小公子』(1886)の主人公。

7 現在確認されている、本間訳以前の"Simple Susan"の訳は、原抱一庵の「名曲『愛禽』」だけである。ここで言及されている「其他二三氏」とは誰のことをさしているのか、未詳である。

8, 9 Marilyn Butler, *Maria Edgeworth: A Literary Biography* (Oxford: Clarendon, 1972) 159, 161; Bertha Coolidge Slade, *Maria Edgeworth 1767-1849: A Bibliographical Tribute* (London: Constable, 1937) 16-30.

10 目次の記載は「CONTENTS / THE BASKET-WOMAN……1/ THE ORPHANS……22/ LAZY LAWRENCE……63/ FORGIVE AND FORGET……111/ THE FALSE KEY……140」となっている。「THE ORPHANS……22」は「THE ORPHANS……26」の誤植である。

11 Frederic Harrison, *Studies in Early Victorian Literature* (London and New York: Edward Arnold, 1895)の"Note"によれば、この本に収められている評論は、1894年から1895年にかけてニューヨークの『フォーラム』(*Forum*)誌と、同時にロンドンにおいて発表されたものに、入念な修正と部分的書き直しを施したものと記されている。「英國文學の不振何ぞ夫れ此の如きや」は1893年に発表されているので、この"Note"の記載が正しければ、「英國文學の不振何ぞ夫れ此の如きや」の原典は、この評論集に収められたものではなく、それより以前に発表された評論ということになる。

12 「バル子ー」とは、女流小説家 Frances Burney (1752-1840; 愛称 Fanny Burney)のこと。

主要参考文献(注の中で言及したものは除く)

佐藤輝夫編、『近代日本における西洋文学紹介文献書目・雑誌篇(1885-1898)』(悠久出版 株式会社, 1970)

宮崎芳三編、『日本における英国小説研究書誌 昭和43-昭和47』(1974; 風間書房, 1980)

宮崎芳三編、『日本における英国小説研究書誌 昭和48-昭和52』(1980; 風間書房, 1985)

宮崎芳三編、『日本における英国小説研究書誌 昭和53-昭和56』(風間書房, 1985)

宮崎芳三編、『日本における英国小説研究書誌 昭和57-昭和60』(風間書房, 1987)

『外国文学研究文献要覧 I <英米文学>篇(1965-1974)』(日外アソシエーツ, 1983)

『英米文学研究文献要覧 [1975-1984]』(日外アソシエーツ, 1987)

『英米文学研究文献要覧 [1985-1989]』(日外アソシエーツ, 1991)

『英米文学研究文献要覧 [1990-1994]』(日外アソシエーツ, 1996)

『国際子ども図書館開館記念 子どもの本・翻訳の歩み 展覧会目録』(国立国会図書館, 2000)

柳田泉、『西洋文学の移入』(春秋社, 1974)

国立国会図書館編、『明治・大正・昭和 翻訳文学目録』(風間書房, 1959)

木村毅・斎藤昌三、『西洋文学翻譯年表』, 岩波講座 世界文学(岩波書店, 1933)

田熊渭津子編, 「明治翻譯文學年表」, 『明治翻譯文學集』 明治文學全集7 (筑摩書房, 1972) 411-35.

榎本隆司編, 「民友社文學年表」, 『民友社文學集』 明治文學全集36 (筑摩書房, 1970) 465-90.

吉井好隆, 『明治・大正の翻訳史』(研究社, 1959)

国立国会図書館整理部編, 『国立国会図書館所蔵 明治期刊行図書目録 第4巻』(国立国会図書館, 1974)

国立国会図書館整理部編, 『国立国会図書館所蔵 明治期刊行図書目録 第5巻』(国立国会図書館, 1974)

『児童文学 全情報 50/90 上』(日外アソシエーツ, 1998)

清水真砂子・八木宜子編, 『英米児童文学年表/翻譯年表』(研究社, 1972)

岡野他家夫, 『明治文学研究文献要覧』(1944; 富山房, 1976)

上村真代, 「マライア・エッジワース "The Grateful Negro": 尾崎紅葉『俠黒児』の原作として」, 『比較文学』, 比較文化研究所編, 創刊号(文化書房博文社, 1995.9): 237-57.

上村真代, 「マライア・エッジワース "Simple Susan" とその翻訳: 原抱一庵『名曲『愛禽』』, 本間久訳『小山羊の歌』をめぐって」, 『比較文学』, 比較文化研究所編, 第2巻(文化書房博文社, 1996.11): 489-511.

A Bibliography of Maria Edgeworth in Japan

Key words : Maria Edgeworth, Bibliography, Literature, Japan

Hiroshi OSHIMA

This bibliography covers material concerning Maria Edgeworth in Japan—Japanese translations, introductory essays and critical studies—published from the Meiji Era to the present day. Notably it includes detailed, bibliographical and explanatory information as regards the entries in the Meiji Era.

Within each category and particular years, all the entries are in chronological order. The bibliography contains the following six categories:

- I Japanese Translations of Maria Edgeworth's Works
- II English Textbooks
- III Introductory Essays on Maria Edgeworth, including Several Reference Books
 - (i) The Meiji Era
 - (ii) The Taisho Era and After
- IV Critical Studies on Maria Edgeworth
- V Japanese Translations of Critical Studies on Maria Edgeworth
- VI Miscellany

This is not a complete bibliography of references to Maria Edgeworth in Japan. I apologize for inadvertent omissions and I hope further research will make the bibliography complete.